



No. '26-1

(No.124)

Jan. 2026

ISGG NEWSLETTER

伊東市善意通訳の会

C O N T E N T S

1. 新年のご挨拶	会長 主原 一雄	2
2. ばけばけの海？ “バミューダトライアングル”	菊池 善次郎	3
3. フランス人への市街地ガイド	野満 勝次	8
4. フランス人への郊外ガイド	小松 二美	9
5. 通訳ガイドは辛いよ・・・でも楽しい！	加茂野まり子	10
【K's サロン報告】	加藤守康	14
【Report on the November 2025 English Salon】	加茂野まり子	15
【新入会員紹介】	山口 章 17	青木 摩利 17
	太田 真紀 18	Jimmy Nishida-Adams 19
【事務局便り】		19
【編集後記】		20



新年のご挨拶



皆様、明けましておめでとうございます。

会長 主原一雄

当会も創立 35 年目を迎える事となりました。多くのボランティア団体が高齢化と会員減少で悩んでいる中で当会は毎年数名の新会員を迎える事ができ、大変うれしく思っています。

又、大きく 3 つに分類できる当会の活動においてもメインである伊東訪問外国人への無料観光案内はもちろんですが、伊東・近隣市民への国際交流機会の提供として始めた英語講演会も本年 6 月 21 日川奈ホテルにて第 6 回を迎える事になりました。今回は米国・日本・韓国の大学で教鞭をとられた Paul McCarthy 博士をお迎えし、三島由紀夫の生誕 100 年を記して英訳した“英霊の声”についてと大学生時代に知己を得た三島由紀夫について語られます。博士はコロンビア大学ドナルド・キーンセンターにて日米友好委員会賞も受賞しておられます。きっと興味深いお話が聞けると思います。

又、3 つ目の活動である伊東在住外国人との交流及び在住サポートも英語サロン・K's サロン、歓送迎会、忘年会等での交流と多岐にわたる在住外国人サポート活動も今後も積極的に続けていく予定です。

今後とも、当会の活動が訪問・在日外国人への大切なサポートだけでなく会員にとっても有意義でやりがいのある活動になればと祈念しております。



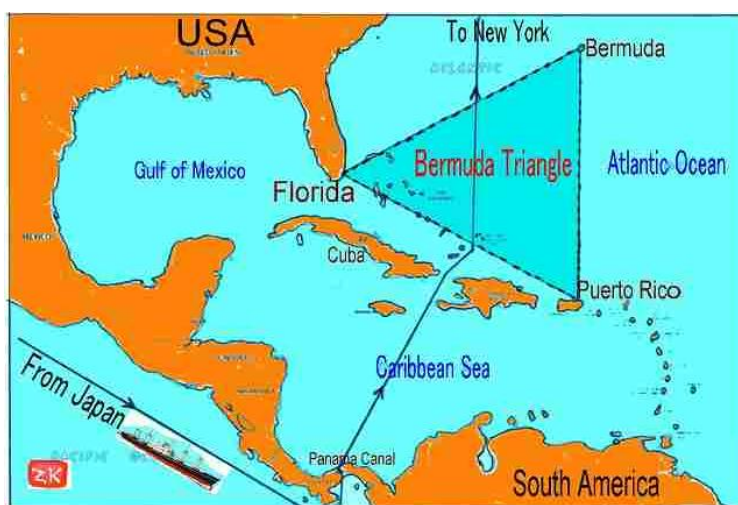
ばけばけの海?



“バミューダトライアングル”

会員 菊池善次郎

バミューダトライアングル(Bermuda Triangle)。多分、多くの会員のみなさんが聞いた事のある言葉ではないかと思います。西部大西洋、カリブ海に隣接した海域で、米フロリダ半島先端、バミューダ諸島、プエルトリコ(Puerto Rico)を結んだ三角形の海域です。ここは昔から



バミューダトライアングル

船や飛行機の原因不明の行方不明など奇怪な事件や事故が数多く発生していることで有名な海域です。

ここ 100 年間に 100 件以上の原因不明の船舶・航空機の行方不明事件があり 1000 人を超える乗組員が消息不明となっていると云われています。「魔の海域」とか「呪われた海」とも呼ばれています。「インターナショナル “ばけばけ” 海域」とも云えましょうか。

●例えばどんな事件があったか？

数ある話の中からほんの数例を記します。本当かどうか疑わしきものもありますが。

- * (最も古い話として) 1492 年コロンブスの航海日誌に「バミューダ付近航海中、空から火の玉が降って来た / コンパスが突然狂った / 船底に海藻がへばり付いて誰も乗っていない船が浮いていた」、という話がかかれていたと云う。

* 1918 年アメリカ海軍の給炭船“サイクロプス号”（12,000 トン。長さ 165m）はバルバドス（カリブ海）を出帆後アメリカ東岸に向かったが、乗組員 309 名と共に行方不明。今もなお船の残骸、死体、遺品等も発見されていない。米海軍最大の謎。

* 1925 年貨物船“コトパクシ号”（2,300 トン 長さ 76m）は米東岸チャールストン港からキューバに向け出帆したが、バミューダトライアングル海域で乗組員 32 名と共に行方不明。
（事件の 95 年後の 2020 年、フロリダ沖の海底で本船の残骸が発見された）

*（航空機の事件）1945 年 12 月 5 日アメリカ軍の爆撃機 5 機がバミューダ付近で訓練中、5 機全てが訓練生と教官（合計 14 名）と共に突如消息を絶った。残骸や遺留品も遺体も全く発見されていない。何が起こったのか今でもわからない。アメリカ最大の航空機ミステリー事件とされている。事件のあった 12 月 5 日を毎年「バミューダトライアングルの日」と制定。

* 1963 年 2 月米国のタンカー“マリーンサルファークイーン号”（総トン数 10,642 トン 長さ 153m）は液状サルファー（硫黄）をアメリカ東岸ノーフォーク港に向け輸送の途次、フロリダ沖で乗組員 39 名と共に行方不明となった。

（後日、同船の船用品と思われるものが海上に浮いているのが発見され US コーストガードは本船は乗組員と共に沈没したものと推定すると結論づけた。原因は積荷の爆発か、荒天によるものか、船の構造的欠陥か、その他か、結論付けられていない）

・・・などなど。

● 私の体験したばけだけ？

私は会社に入ってから 3 年間、ずっと日本/アメリカ東岸（ニューヨーク港など）を往復する航路の貨物船に連続 3 隻乗船していました。バミューダトライアングルを必ず通らなければならない船でした。同海域の通過には約 24 時間かかりますが、往復合計 10 回以上通りました。

先輩航海士からはバミューダトライアングルについて、いろいろ怪談じみた話をよく聞きました。

『ここは昔から奇妙な海難事件や航空機事故がよく起こっていることで有名場所だ。夜一人ワッチ（航海当直）の時は特に気をつけて見張りを厳重にする様に！』

新米航海士への有難いアドバイスと思い一生懸命まじめにワッチしたところです。

幸い私の乗った船には唯の1度もおかしなことは起きませんでした。いや、1度だけバミューダ三角形の中ではありませんが、少し北側のアメリカ沿岸航海中、ジャイロコンパスが異常な動きをするということがあります。

1964年（昭和39年）12月のことです。“駿河丸”（貨物船、9,523トン、ニューヨーク航路）と云う船に乗っていた時のことです。ノーフォーク（バージニア州）からサバンナ（ジョージア州）へ向きの航海中、夜の10時過ぎ、船橋で真っ暗な海を見つめながら操舵手と二人でワッチをしていた時です。どうも本船の進む方向がお



かしいことに気が付きました。進行方向を示すコンパスの示度は間違いなく方向を指しているのですが、レーダーを見ると本船は陸に向かって進んでいるのです。直ちに船を左転させ、まず船を沖に向け、船長に知らせました。船長がすぐ昇橋し事なきを得ましたが、もし異常に気が付くのがあと1時間遅く、そのまま真っ暗闇の中を航海していたら間違いなく本船は陸に乗り上げ大変なことになっていたところでした。現在と違ってGPS（全地球測位システム）など全くない時代のお話です。その後はレーダーを頼りに航海し何とか無事サバンナ港のパイロットステーションに到着することが出来ました。事件の原因はジャイロコンパスの突然の故障だったことが分かりました。サバンナ港で専門業者に依頼し修理、一件落着となりました。やれやれ、伝説の船の一隻に加わるどころでした。

私はその後もコンテナ船や自動車専用船でバミューダ海域を2～3回航海しました。異常な出来事は起こりませんでした。又、飛行機でもニューヨークからサンファン（プエルトリコ）へ出張したこともあります。幸い何事も起こりませんでした。

● バミューダトライアングルの謎の真相

バミューダトライアングルの謎については船や航空機の所有者や運航者のみならず、US コース

トガード、アメリカ海軍、アメリカ海洋大気庁(NOAA)、アメリカ国家運輸安全委員会(NTSB)、その他世界中のいろいろな分野の科学者や専門家がいろいろな観点から調査し謎の原因を探ってきました。Case by case,その時代その時代に得られる調査方法/判断材料に基づいて調査が行われ謎の原因が推定されて来ました。

例えば、宇宙人説、ブラックホール説、カリブの海賊バッカニアの急襲を受けた説（特に帆船時代の説）、メタンハイドレート説（メキシコ湾流の暖かい海水が大量のメタンガスを発生させ船が巻き込まれたと云う説）、地磁気の異常説、ダウンバースト説（空の冷気が急速に海面に落下且つ爆発し飛行機がこれに巻き込まれたと云う説）、敵対国の潜水艦が秘密裏に襲ったと云う説、その他次元・時空間移動説や電子雲説（多分に SF の世界）です。そして近年通信技術を含めたあらゆる科学技術の進歩に伴い原因が判明した説が「気象・海象の急変による事故」説です。

つまり、巨大なハリケーンや竜巻に巻き込まれ、船も乗組員もあっと云う間に海底に没してしま

ったと云う説です。この説を裏付ける最近の例として、10 年ほど前の 2015 年 10 月に発生したアメリカの大型コンテナ船“EL Faro 号”（31,515

トン、長さ 241m、乗組員 33 名）の行方不明事件があります（本件は 2020 年 1 月号 Newsletter で少し触れました）。本船はジャクソンビル港（フ

ロリダ）とサンファン港（プエルトリコ）を往復する定期船です。船長はその海域に慣れたベテラン船長。9 月 31 日ジャクソンビルを出港しましたが 10 月 1 日夜の通信連絡を最後に行方不明となりました。その後米コーストガードの懸命な捜索活動が続けられ、11 月 1 日本船はバミューダトライアングル 4500 メートルの海底に沈んでいることが分かりました。乗組員 33 名と共に。



行方不明となったアメリカのコンテナ船“EL Faro”
総トン数 31,515 トン 乗組員 33 名 （CNN 提供）

捜索活動には近年（1960 年頃以降）急速に開発/実用化された手段（水中ドローンやソナーなど）が使われました。2000 年以降船舶への装備が義務化された GPS や、AIS（自動船舶識別システム）、VDR（航海情報記録装置 飛行機のブラックボックスと同じ）は捜索を容易にしました。また、気象衛星（日本のひまわりや米 GOES）、その他人工衛星を使った各種通信機器/連絡手段は欠かせな

いものでした。

この様に以前だったらバミューダトライアングルの謎として伝説になったであろう事件も最近では本船の様に科学的な手段で謎解きができる様になりました。

それでも分らないこともあります。本船船長は航路付近には巨大ハリケーン(Joaquin ホアキン)が近づいていることを事前に把握していたにも拘^{かかわ}らず、何故船をハリケーンに向けて進めたのか？ということです。人の心の中(考えや判断)や行動(ミス)の謎は科学技術の発達だけでは解明されないということです。

● あとがき

バミューダトライアングルって、本当に恐ろしい海なのか？ 近年アメリカ海洋大気庁(NOAA)や世界の海洋専門家は「バミューダトライアングルは特別な謎のある海域ではない」と明言しています。

世界最大の海上保険会社ロイズ(ロンドン)は同海域に特別な危険海域の保険を設定していません。

地球上の普通の海と同じ扱いです。では、何故「魔の海」とか「呪われた海」とした伝説が広がっているのでしょうか？

確かにカリブ海やバミューダトライアングル海域は古く帆船時代から海上交通量が多い所と考えます。しかも巨大ハリケーンの発生する場所として世界でも有名な場所です。竜巻や霧もよく発生します。北赤道海流やメキシコ湾流と云う強い海流が流れているところです。島や浅瀬や暗礁が多いところです。海難が多く発生する(発生していた)場所だったろうと云うことは想像できます。事故の原因調査もままならぬ時代、謎は謎を生み都市伝説的に話は誇張され、人から人へ伝わって有名になっていったものと思われます。

バミューダトライアングルの謎にヒントを得て多くの海洋ミステリー小説が出版されています。人間は原因がわからない謎めいたこと(ミステリー)に興味を持ち、謎の解明に快感を抱く動物だと何かの本に書いてありました。解けない謎は謎として残しておきたいという心理も働き、いまだにバミューダトライアングルの話は世界中の人に興味がもたれているのではないのでしょうか。

フランス人への市街地ガイド



野満勝二

令和7年12月9日（火）午前9時、フランス人青年V i n c e n t C o r l a y氏をK' s H o u s eまでお迎えし、多少かじったフランス語の基本的な挨拶を申し上げ、氏からも、鋭意学習中であるとする日本語での御挨拶をいただく中で、互いの緊張感が徐々に緩み、親近感が高まったところで市街地の案内をスタートした。

氏はB r e t a g n eのR e n n e s市で生まれ育ち、経営主体が日仏いずれかであるかは確認し損なったが、電子機器のエンジニアとして、出張などにより今回も含め3回の来日経験があり、今回は、大船での日本人スタッフとの会議をメインに、旅程の前後に東京、京都・大阪見物を予定したとのことであった。なお、伊東市は初めての訪問であり、1泊2日の滞在の中で、静かな、美しい町であるとの印象を語っておられた。

まず、市内最高層の伊東市役所を訪れ、最上階にまでご案内し、市街地の全景を展望いただいた。曇りがちの天候ではあったものの、市街地の眺望を楽しんでいただけたものと思う。その後低層棟に移動し、かつて善意通訳の会の定番コースであった市議会議場を訪れ、見学をしていただいた。私自身としても、市役所生活39年のうち30年間を過ごした古巣でもあり、久しぶりに訪れ、感慨にふけるひとときとなったが、氏におかれても、貴重な経験となったとのコメントをいただいたことをうれしく思った。

1時間ほどの滞在の後、市役所を離れ、海の駐車場に車を置き、本邦初の洋式帆船建造場所とされる場所も含めた松川沿いの遊歩道を散策しつつ、東海館まで歩を進めた。東海館の見学に際しては、特に建築様式、館内施設の意匠など、私の乏しい知識では十分な説明もままならず、申しわけなく思いつつも、様々な展示物などを通じて、1938年の伊東線開通を前にし、観光地、温泉保養地として発展しつつあった昭和初期の伊東市中心街の情緒を肌で感じていただくことができたものと思う。

東海館からの帰路、伊東国際交流協会を訪れた後、V i n c e n t氏の好みを伺う中で、最近新装開

店となった某そば屋にて昼食をとることとしたが、平日、しかも12時前の時間帯にもかかわらず、店内は満席に近く、V i n c e n t 氏も満足をいただいたように思う。

当初、木下奎太郎記念館にも立ち寄り、フランスでの留学経験もあり、レジオン・ドヌール勲章を授章されている太田正雄氏の足跡にも接していただく案も頭の中にあったものの、時間的制約の中で、残念ながら見送った。最大限のおもてなしができたかどうかは心もとないが、V i n c e n t 氏の所期の訪問スポットである城ヶ崎海岸、大室山への御案内役を担っていただくべく、午後1時、小松夫妻にバトンタッチを行った。

フランス人への郊外ガイド



小松 二美

令和7年12月9日（火）午後1時、野満氏よりフランス人青年V i n c e n t C o r l a y 氏の案内役を引き継いだ。野満氏にC o r l a y 氏をご紹介いただき、挨拶をかわした。笑顔が素敵でFriendlyな方だった。

最初は大室山へと予定していたが、8日より10日程、リフトの点検、整備のため運行禁止との情報を得、説明した後さくらの里へ向かった。季節柄、木々に花はほとんど咲いていなかったが、3月、4月は種々の桜が満開となり、桜祭りが開催され、沢山の人で賑わうことを説明した。曇りであったが日が差す時もあったので大室山が綺麗に見えた。彼は写真を何枚も撮っていた。毎年2月に行われる山焼きの事も説明した。

続いて、城ヶ崎海岸へ向かった。門脇灯台に着き、67段の階段を上って展望台へ行った。パノラマ景色が素晴らしかった。伊豆七島の見取り図が分かりやすく示されており、私も3島しか知らなかったのが勉強になった。彼は中級程度の日本語をマスターしているとの事、七島の漢字にも興味があり読める字が多かったのが驚いた。吊り橋を渡って岩場へ行った。



城ヶ崎海岸、門脇灯台を望む

ここでも写真を何枚も撮りながら絶景を楽しんでいた。人とすれ違うたびに揺れる吊り橋が怖いというよりは楽しそうだった。

半四郎落としの案内板を見つけて説明したところ、そんな悲しい物語が背景にあったのかと感慨深かったようだ。この案内板においても、知っているカナや漢字を見つけるのに熱心だった。途中まで3人で一緒に声を出して読んだ。日本語をもっともっと勉強したいとの意が伝わってきて親近感が湧いた。彼の単語の覚え方は、あるアプリを使用し、それに新しい単語を入れて、1ワードごとに4日毎、ほぼ暗記出来たら8日毎という風に少しずつ間を開けていくのだそうだ。早速、‘里’と‘松’の漢字をアプリに入れていた。

その後、小室山へ向かった。何体もの恐竜像を見ながら頂上まで登った。階段が多く、また陰しいところもあり、私達二人は大変だったが、彼は若いし、ランニングが趣味で、会社のお昼休みには走っているとの事、疲れた様子はなかった。リフトに乗らずに下まで下ったが、景色が素晴らしかった。この時点でもう4時半近く、あたりが少し暗くなり始めていた。

コーヒブレークをしようとのことで、伊東市内へ戻った。途中、荷物を K' s House でピックアップするためにホテルへ寄った。その後、喫茶店へ。コーヒを飲みながら30分程、お喋りをした。彼が働いているのは三菱電機のヨーロッパにおける研究開発センターで、出張で時々来る大船の情報技術研究所というのは偶然にも透さんが昔働いていたところだった。二人の話がはずんでいた。日本ではコンビニに寄るのが楽しみでおにぎりや大福餅が大好きだと言っていた。その後、電車の時間(17:45)に間に合うべく伊東駅に向かった。

通訳ガイドは辛いよ・・・でも楽しい！



加茂野まり子

研修のみに終わってしまった2024年でしたが2025年は果たして私は無事ガイドデビューができたのでしょうか？

2024年の暮れに静岡市に本社を置く全国展開をしているある旅行代理店から突然メールを受け取りました。「御社に登録しませんか？」と。内容を読むと、個人客（業界用語ではFITと言います）専門の

ツアー希望のお客様とガイドをマッチングする会社でした。もちろん、早速登録手続きをしました。その後審査があり無事登録完了です。ガイドを引き受けられる地域も登録する必要があり、私は日帰りで仕事ができそうな静岡県、神奈川県、そして東京都の3ヶ所にしました。登録後1週間後くらいから、なんと毎日のようにガイド募集のメールが届くではありませんか！ その中から自分の都合に合わせて応募しますと、すぐ即決でガイドアサインになります。これまで応募してはダメの繰り返しでしたので、こんなにすんなり決まっていいいのかなあ？と最初は半信半疑の状態でした。

静岡県内はほぼ100%清水港のクルーズ船のお客様のガイドです。人数は2〜5名くらいで、専用車付きかウォーキング主体（公共の交通機関利用）のどちらかで、こちらも自分の都合の良い日程の方を選びます。全て6時間が基本で、お客様により延長になることもあります。ツアー内容はお客様と相談してテラーメイドしますので、交通機関の時刻表を確認しながらいかに効率よく案内場所を回るかを考えるのがかなり労力を使い結構時間もかかります。ツアー内容が決まると、まだ行ったことがないところや、道順などを確認するために下見が絶対必要になります。この費用は全額持ち出しなのと、FITの場合は清水までの交通費も自己負担になるので、実際のガイド料はかなり減ってしまいます。ある先輩からの話では最低二年間はほとんど赤字で持ち出す方が多いことを覚悟した方がいいと。そうなんだ、現実 is 厳しい！ 通訳ガイドで生計を立てられる人はほんの一握りの人で、その方達は主にスルーガイドと言って1〜2週間の長いツアーに従事することが多く、年間200日くらいの稼働日と聞きました。若くないとできない仕事だなあと、改めて現実の厳しさを感じました。

ツアーシーズンは3月からなので、3月にFITを2本と新人研修で所属したNPO法人から昨年にアサインされた団体1本が私にとってのデビューになりました。実際はFIT2本がキャンセルになってしまい、これは良くあることだそうで、団体1本のみが3月の実際の業務になりました。

団体ツアーはその業務内容の半分が添乗員のような仕事で、最も重要なことは「迷子を出さないこと」、と何度もエージェンツ担当者に言われました。団体ツアーには「旅程管理業務主任者」という資格が必要で、こちらも昨年すぐに取りましたので、資格的には問題ありませんでした。

さてガイドデビューとなった3月の団体はどんな様子だったのでしょうか？ 団体ガイドの場合、ホテルに前泊してガイド全員（この時は25名）の顔合わせとコースの確認のミーティングを行います。この時はAIDA Stella号というドイツの船会社の客船でお客様はほとんどがドイツ人とのことでした。ドイツ語のガイド数が少ないので80%のガイドは英語なのです。ドイツ人は英語が理解できる人が多いからという理由でしたが、実際はドイツ語しかわからないお客様もバス1台に数名いて、「なぜドイツ語ガイドではないのか」とエージェントにクレームが多数あったと後日聞きました。

さて、前夜の打ち合わせでとんでもないショックなことが起こりました。当初知らされていた担当のコースが突然変更になったのです。しかもドイツ語ガイドと二人体制になっていました。こんなことってあるの？ と思いながらもプロとしての自覚が必要と思い「わかりました」と引き受けました。でも頭の中は真っ白、胸はドキドキ。突然言われたコースはあまり準備していなく、しかも資料も持ってきていない状態で「どうする私??？」

驚いたことがもう一つ起こりました。エージェントからの指示では私が英語でガイドをし、新人ドイツ語ガイドが通訳する、というものでした（私も新人でしたが）。ところが、そのドイツ語ガイドは新人どころか大ベテランの初老の男性で二人での打ち合わせの最初から「僕はあなたの通訳などやらない。そうなら一切話さないし、あなたのガイドをチェックする」と上から目線の冷ややかな言葉が飛んできました。「何、このおじさん！」と心で呟きながらも明日のガイドは辞退するわけにはいかないので、なんとかその男性を宥めすかし持ち上げて「いやいや、〇〇さんが全部ガイドをやってください、私はあなたのアシスタントをやりますから」ということでなんとか落ち着きましたが、本当に“とほほ”状態でした。

翌日のツアーのコースは、清水港→三保の松原→日本平・夢テラス→エスパルスドリームプラザ というものでした。私がアシスタントに徹したためか、かの男性ガイドは気持ちよくドイツ語でのガイドをされて、ツアーの最後には打ち解けて話をするようになったのはホッとしました。金沢の某大学の教授とか日独協会の理事とか、かなり沢山の肩書きを持った方でガイド歴も長いようでしたが、三保の松原は来たことがない、と言って私を驚かせました。ドイツ語でどんなガイドをしていたのだろうか？

私のガイドデビュー戦はガイドが出来なかったというとんでもないツアーになりました。ですが、この事件のおかげで、どんなことが起きても対応できるという自信がついたことは収穫だったと思います。この後、4月から7月までFIT主体に数件の団体を含めて1ヶ月に4～5件ほどガイドをやりまして、静岡市のメインの場所はほぼガイドができるようになったと思います。もちろんまだまだ知らない場所もあり、もっと深掘りして知識を増やすことが必要なのはいうまでもありません。ガイドは常に勉強して知識の蓄積と情報のアップデートをしなければなりません。

私は基本的には清水港のクルーズガイドを中心にしておりますが、2025年は東京のガイドと名古屋港のクルーズガイドをそれぞれ1回ずつやりました。東京でのガイドは4人のお客様を4時間で浅草寺、築地場外市場、明治神宮を案内するというものでした。交通費だけでガイド料の半分以上が飛んでしまい、労多くして見入り少なし、です。下見の費用も入れると大幅な赤字です。ですので、これ以降東京でのガイドはやめました。

名古屋港クルーズガイドは下見の費用を考えるともちろん最初は赤字になるのですが、ツアー時間は3～4時間でガイド料金もFITより高く交通費も全額支給されるのでやりがいがあります。FITと違ってコースはエージェントが決定しますので、自分であだこうだと考えながらコースを組み立てる必要がなくて楽です。クルーズガイドの専門会社も数社あり、どの会社も一年前から募集をかけますので、私のような高齢者は果たして一年後は大丈夫か？という課題もあります。

8月と9月は酷暑のために私の年齢ではガイド業務は無理だと思いお休みを取りました。10月と11月にそれぞれ2本ずつ行い、2025年のガイド業務は終了いたしました。予約していただいたツアーのキャンセルも想定以上に多く、もっとやれたかなあと思う反面、一つのツアーが終了すると最低3日間は疲れ切って体がガタガタになるという現実、十分に頑張ったなあ、という思いでいます。団体とFITともゲストはほとんどアメリカからでしたが、純粋なアメリカ人以外にアメリカ国籍のベトナム人や中国人、メキシコ人、プエルトリコ人など多種多彩で、特にスペイン系のゲストはとても陽気でフレンドリーでした。

通訳ガイドという仕事は、体力が一番、そして同じように常にアップデートの必要がある知識の蓄積、ホスピタリティ精神、エンターテインメントのセンス、など重要な要素が多くあり、やりがいがある反面、本当に“疲れる！”。

2026 年も引き続き 2025 年のようなペースでできるかどうか、甚だ心許ない現状です。資格を取得したときは 80 歳まで頑張ろう、と思ったのですが。

続けられていましたら、またこの会報でご報告したいと思います。

最後に蛇足になりますが、本来の ISGG の活動である通訳ガイドの機会がコロナ以降ほとんどなくなっている現状をどのように解決し、伊東市の観光事業に貢献できるかを全国通訳案内士の仕事をしながら時々考えておりました。そして私の経験を今後は少しでも ISGG の会員の皆様と共有して、ガイドのスキルアップができれば嬉しく思います。



〈K's サロン報告〉

1. 日時： 2025 年 11 月 20 日（木） 19 時 ～ 21 時
2. 場所： K's ハウス、ラウンジ（談話室）
3. 参加者： 小松（透）、小松（二）、岩村、加藤（守）

〈K's ハウス宿泊旅行者〉 5 人



- (1) アメリカ人男性 (Gray さん。ノースキャロライナ州出身。富士宮市から今日伊東に着いたばかり。教会でオルガン弾きをしている音楽家。)
- (2) カナダ人男性 (Chris さん。トロント市在住の会社員。Jerome さんと高校・大学の同級生。)
- (3) カナダ人男性 (Jerome さん。フィリピン生まれ。以前バンクーバー市に住んでいたことがある。日本に2年半住んでおり、京都・大阪・高山・沖縄などを訪れた。今日は大室山の頂上でアーチェリーを楽しんだ。)
- (4) オーストラリア人女性 (Shona さん。メルボルン市近郊に在住。日本語と韓国語を学んでいるが、韓国語の方が難しく感じている。今日は大室山を訪れた。)
- (5) 韓国人男性 (Inseople さん。今日は大室山を訪れた。富士山がとても綺麗に見えた。)

4. 状況と感想：

- * 旅行者は4か国から男性4人女性1人が集まってくれ、国際色豊かであった。
- * 大室山が人気の観光スポットだと感じた。(4人は当日訪れ、1人は翌日行く予定とのこと。)
- * 伊東市街地や郊外の見どころについて話し、「オーバーツーリズム」、「和田湯の江戸将軍への献上」、「好きな映画」、「これから訪れたい場所」など話題が広がっていった。
- * どんな土産を買ったらよいか相談があり、伊東市の名産品であるぐり茶、魚とイカの干物、温泉まんじゅう等の和菓子、みかん、しいたけ、わさびなどを勧めた。
- * 友好的な雰囲気の中で「一期一会」の出会いを楽しみながら、異文化コミュニケーションの輪が広がった。

〈Report on the November 2025 English Salon〉

Date: November 26, 2025

Reported by Mariko Kamono

Date held: November 22(Sat.) from 1:00pm to 3:00 pm

Place: Wakaba café

No. of Participants: Total 13 (1ALT, 10 ISGG members, 2 guests)

Stephanie, Ted Jones, M. Kato, Kamono, Komatsu(T), Komatsu(F)

Mizutani, Nakahara, Nushihara, Sagara, Soga

Guests: Alexie and Maki Ota

This month's theme: What are you thankful for this year?

<Summary>

- We welcomed two guests this month. One was Alexie, who is the ALT at Minami-izu Junior High School, introduced by Stephanie. We hope she will be our regular member for English Salon. The other guest was Ms. Maki Ota who became a member of ISGG this month. Maki visited the ISGG's booth at the ISIR Festa held on November 9 and showed her interest in our activities.
- The followings are some talking points on the theme shared at the salon:
 - * Thankful for the first experience to sing on the stage at the Karaoka Performance event.
 - * Thankful for the family's good health
 - * Grateful for the partner, family members, close friends, community members, associate members, and all persons around me supporting me and making me enjoy the life
 - * Thankful for living in beautiful Ito. Agreed with my friend's saying "Izu is the best place to live"
 - * Thankful for the opportunity to have met a wonderful singer who inspired me
 - * Thankful for having my favorable friends and doing favorable camping
 - * Thankful daily for everything around me
 - * Thankful for the reunion with my old friend whom I haven't met for a long time
 - * Thankful for my gym instructor for providing me with the right exercise to improve my pain in the knee
 - * Grateful for my staying in good health which allowed me to expand the activities

The next English Salon will be held on January, 31 (Sat.) from 1:00pm at Wakaba.

There is NO English Salon on December 2025.

The talking theme is "What is your plan for the new year – things you want to challenge, places you want to visit, and anything you want to do in 2026.

【新入会員紹介】

山口 章



善意通訳の会の皆さま 私は伊東で生まれ育ちましたが高校卒業後東京で学生生活をし、その後大阪、兵庫で就職しました。東京に移住してから東京都指定の上下水道工事店、東京都住宅供給公社の指定店として 様々な工事を施工してきました。働きながら日本の山々やネパールの山々をトレッキングしてました。また イギリス、フランス、スペイン、イタリアはヒッチハイクで回り、その後バス、電車を利用してパキスタン、アフガニスタン、インド、ネパールを旅行しました。最近ではキューバ、アルゼンチンを旅行しました。現在は、伊東市ヨット協会に所属してセーリングを楽しんでいます。なぎさ公園の横に県から敷地を借りてヨットはラックに並べて置いてあります。会員は今では激減して15名ほどで活動しています。風を頼りのヨットは、時には風に恵まれ爽快なセーリングを楽しむことができます。善意通訳の会では多くの外国の方や会の皆さまと交流出来る事を楽しみにしています。

青木 摩利



こんにちは。昨年、入会させていただきました青木摩利と申します。伊東国際交流協会働き始めてから、あっという間に10年が経ちました。伊東での生活も、気がつけば約18年になります。それ以前は、東京で映像関係の仕事に携わっており、日本を海外に紹介する番組を制作したり、その後はNHKの「Cool

Japan」などにも関わっておりました。しかし、24 時間体制の仕事に疲れた頃、伊東ののんびりとした空気に憧れ、移住することを決めました。

私が世界に目を向けるようになったきっかけは、高校卒業後にアメリカの大学へ進学したことです。Country Road ♪の歌で知られている、West Virginia 州の大学でした。親には大変申し訳ないのですが、勉強よりも遊びのほうに力を入れてしまい、卒業までに4年半もかかってしまいました。そこで出会った友人たちは、今でも私の宝物です。お陰様で、高校生まで鳥かごの中にいたような状態だった私が、人種のるつぼであるアメリカで生活する中で、一気に視野が広がったと感じています。卒業後はずっと日本で生活しておりますが、仕事柄、その後もさまざまな国の方々と接する機会に恵まれてきました。その点では、常にありがたい環境に身を置いていたと思います。

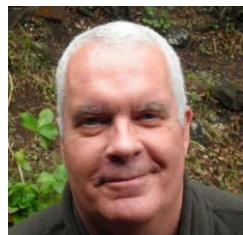
善意通訳の会の活動については以前から存じ上げており、興味はありましたが、通訳ボランティアに十分な時間を割くことが難しく、これまで入会を控えておりました。しかし、活動内容は通訳だけに限らないことを知り、イベントなど、参加できる機会もあると分かり、このたび入会を決めました。何もお役に立てずに申し訳ないのですが、皆さまと一緒に国際交流を楽しませていただければ幸いです。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

太田 真紀



太田真紀と申します。埼玉から伊東市に移住して20年、今ではすっかり海なし生活は考えられないくらいになりました。子育てがひと段落してからは、学習塾にて主に中学生を相手に勉強を教えています。元から英語に関心があり勉強を続けてきましたが、直接外国人と話す機会がなく、今後は英会話を中心に学び直したいと思い、こちらの会に参加させて頂く事になりました。夢はたくさんの外国人といろいろな話をすることです。よろしくお願いします。

Jimmy Nishida-Adams



My name is Jimmy Nishida-Adams, and I joined the Ito SGG in January of this year.

I am originally from the United States and grew up in northern San Diego County, California. I studied writing and literature at California State University, and choosing Japanese as my foreign language during my university years became a turning point in my life. After studying abroad in Tokyo, Japan gradually changed from being a place I visited into a place where I wanted to live.

In 2019, my wife and I moved to Izu. We were drawn to the balance of ocean and mountains, and because we were already familiar with the area, the move felt natural. Today, I work as a professional guide for visitors from overseas, but much of what I continue to learn comes from daily life and conversations with local residents.

Speaking Japanese with people who do not use English has been one of the most valuable parts of living here. At the same time, there are moments when it is a relief to speak Japanese with Japanese people who also understand English. They can help me find the right word, and more importantly, they understand the frustration of knowing what you want to say but not yet having the language to express it fully.

Since moving to Izu, I have especially enjoyed learning about the *mukashi banashi* associated with the area. Stories such as the Red Cow of Fukusen-ji and the legend of the giant snake of Mt. Omuro feel closely tied to the local landscape rather than being abstract folktales.

I am particularly interested in the mythology of Konohana-no-Sakuya-hime and her sister Iwanagahime as it is understood locally. While these figures are known throughout Japan, the version connected to Mt. Omuro and its Sengen Shrine reflects a story shaped by this specific place. The mountain itself seems to play a role in how the story has been remembered and passed down.

Viewing a place through its folktales and mythology changes how the landscape is seen. Izu and Mt. Omuro become more than physical locations; they feel like places layered with memory and meaning.

The Ito SGG brings together people with a wide range of experiences, and I continue to learn from each conversation. I look forward to deepening my understanding of Ito and Izu through these exchanges and to sharing that learning with others.

〈事務局便り〉

前回の NEWSLETTER 発行からいくつかのご報告があります。 まずうれしいお知らせですが 10 月より 4 名の新会員を向える事になりました。 太田さん、青木さん、桜井さん、Nishida-Adames さん、Welcome、そしてよろしくお願いします。

当会の定期活動のイチゴサロン、K's サロン、英語サロンも予定通り開催していますが、11 月は伊東国際交流フェスタへ出展しました。これにより多くの来場者に当会の活動を知っていただけたと思います。 又、12 月は恒例の Year-End-Party を開催しました。 今回は 23 名という過去最高?の参加者になりゲストの ALT 達も含め大いに盛り上がりました。

又、6 月 21 日に川奈ホテルにて第 6 回英語講演会を日/米/韓の大学で教鞭をとられ三島由紀夫の本の英訳者でもある Dr. Paul McCarthy に願う事が決まりました。

【編集後記】

遅ればせながら、明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願いしたいと思います。

主原会長の挨拶にもありましたように、本年 当会は何と 35 周年を迎えます。

まずは、Paul McCarthy 博士の講演会がウマくいきますように。

菊池さん、今年も年頭からのご寄稿ありがとうございます。音に聞く魔のパミュータトライアングル、コロンブスの大航海時代から、極最近の話までご自身の体験談も交えてお書きくださいました。

文中のコンテナ船 El Faro 号、faro はスペイン語で「灯台」、まさに「灯台下暗し」の感であります。

野満さん、小松さん フランス人 Vincent Corlay さんのご案内、お世話様でした。野満さんの午前中の市内案内、小松さんの午後市郊外の案内、お二人の心こもるガイドで Vincent さんが伊東の観光を満喫されたことが良くわかります。このレポートで、ISGG の本来の活動を再認識致しました。

加茂野さん「通訳ガイド」のお話。プロの厳しさを感じさせられました。これまで知らなかったプロならではの内幕を教えて頂きました。水鳥は気楽にスイスイと泳いでいるように見えるけれど、その実、一生懸命に水かきを動かしている.... そんな場面を彷彿とさせるお話です。ご苦労がしひしひしと伝わってきました。今後とも、プロの立場からのご指導ご助言のほどお願い申し上げます。

続いて加藤守康さん、K' s Salon の詳しい報告有難うございました。K' s House の様々な guests との交流を細かく綴って頂きました。

そして English Salon の report 11 月分、拝読しました。加茂野さん有難うございます。今年も参加者が、より一層増えますことを願っております。

新人の方々、山口さん、青木さん、太田さん Jimmy Adams さん、Welcome to our ISGG!
どうぞよろしく、そして今後のご活躍を期待致しております。

さて、今年は午年。「編集後記がマズイ、下手だ。」と言ったお言葉があるかもしれませんが、そんなことは 馬耳東風、つまり馬の耳に念仏。しかしこのままだと「あいつとは馬が合わない」と言われそうだから気を付けなければ。 馬と言え、中国語の声調の練習文「妈妈骑马 马慢 妈妈骂马」（お母さんが馬に乗る 馬がノロいので お母さんは馬を罵る）というのがありますが、馬脚を露さないうちに、こちら辺で。

本年も編集部一同、皆様のご寄稿を心よりお待ち致しております。

(T.K. 記) Tea & Cake

伊東市善意通訳の会 (ISGG)

会長 主原 一雄

(事務局) 〒413-0232

伊東市八幡野 1324-40 主原 一雄

e-mail: larryn@estate.ocn.ne.jp

(ホームページ) <https://itosgg.org>

(編集委員) 稲葉尚子 曾我廣子 加藤達雄